天空富嶽飛龍七福神（部分） 2015 （ミクストメディア）

Melody of the Firmament

Journal of Koji Kinutani Tenku Art Museum

天空の調べ （絹谷幸二 天空美術館 機関誌）

2020.11

vol.3

美術の力を今こそ

絹谷幸二 天空美術館　顧問・キュレーター　南城守

天災、疫病、戦禍…。つくづく人間の歴史は多くの苦難を乗り越えながらいかに「生命の輝き」を実現させるか、その試練の集積であったように思う。人々はそこに美術・藝術を通じて奇跡を求め、その力を信じたのかもしれない。

周知のように美術史に輝く名作には、逆境の中からの誕生秘話に彩られたものが多く、とりわけ大きな社会変動の後には、今までにない美術動向が興っている。たとえば20世紀美術では二つの大戦を挟んで「ダダ」や「シュルレアリスム」、そして「アンフォルメル」が、また、世界恐慌以降、近代社会の危機的状況にあって同時派生していった「抽象表現主義運動」などがそうである。苦境に直面することによって人間の深層心理の中に渦巻く赤裸々な真情が吐露され、藝術家の鋭敏な感性はそれを新たなる価値観と美意識の創生への糸口としていった。

かつて祈りや救済への標として教義の視覚化であり、また王侯貴族や為政者の権力を誇示する役割を担っていた美術は、近代以降、美術家自身の内観と内省によって育まれた問題意識を主義・主張に反映させ、怒り、悲哀、絶望、不安、狂気など人間の在り方を真摯に問う造形へと進展した。それは決して美しい、心地よいだけの表現ではない「命の叫び」を内在させた人類への「警鐘」としての大いなるメッセージの表出でもあった。

時代が美術を生むという。ならば、100年に一度に例えられる未曽有の危機に面し、今後どのような美術動向が誕生するのか、まさに現代アートの真価が問われる昨今ではないだろうか。

絹谷幸二 天空美術館では、この時期にこそ是非ご鑑賞いただきたい特別展「美神降臨～≪復活≫の時」を開催している。中でも展示中の「ニューヨークの天使」と「朝陽富嶽玉取り龍 不二法門」の、いずれもスティロフォームを素材に着色された巨大立体は必見だ。

「ニューヨークの天使」は1998年のニューヨーク個展に際し、国際情勢の不安を鑑み世界の平和への祈りを天使に託すという願いで造られたものである。鳥かごのような木偶の胴体、そして溢れる涙と平和を訴えかける顔。大空に羽ばたこうとする翼には核弾頭をイメージするかの

ようなミサイルが挟まれていて、それを目にした途端に胴体が原爆ドームに見えてくる。後に全世界を震撼された同時多発テロを先見させるかのような緊張感を漂わせ、人類が繰り返す愚行を切実に訴えかけてくる。なによりもご注目いただきたいのが本作背面に配された大輪の花だ。これは悲劇を越えたところにある人間への信頼と再生を象徴している。人類愛を掲げる大いなるメッセージ、そこに息づくのは紛れもなく「夢と希望」の復活である。

「ニューヨークの天使」の背面に彫られる“人間への信頼と再生”を象徴する大輪の花

「ニューヨークの天使」と「アラベスク」の展示風景

「朝陽富嶽玉取り龍 不二法門」は、2019年に制作された高さ2m・幅3mを超える大作である。燦々と輝く朝陽を背景に雲海から望む富士（不二）の高嶺。そこに宝珠を手にした赤と青の龍神が絡みつくかのように飛翔する。各龍神の背には童が跨り、あたかも豊饒なる自然と永遠の生命力を象徴するかのように歓喜の声をあげている。まるで疫病退散への力強いエールが込められたような勇壮さがここにある。

「不二法門」とは、「維摩経」における核心部分で、善悪、美醜、生死、戦争と平和など相反する二つの概念はもともと一つのものの部分であることを説くものだ。互いの存在を認め、森羅万象を受け入れることによって知る生きる知恵、光明への啓示である。プラスがあるからマイナスがあり、その逆も然り。人生は一方を見ているだけでは袋小路に入り込むもので、双眼の思想の大切さを教える。

朝陽富嶽玉取り龍 不二法門　2019 （スティロフォーム ミクストメディア）

それはさながら、美術とは上手下手、得手不得手、長短所に捕らわれず、個性の輝きをすべて包み込む自然の豊饒のようなものでなければならないと説く、絹谷幸二の藝術観と共鳴する。奈良の大仏様が鎮座する古都で培った絹谷幸二の仏教的思想が、鮮やかに息づいているといえるだろう。

ところで今回は、上記2点の展示空間にもぜひご注目いただきたい。「ニューヨークの天使」は、絹谷幸二の代名詞ともなった壁画の古典技法アフレスコ（フレスコ）による20連作の傑作、「アラベスク」に囲まれるかのように展示されている。「アラベスク」はかつて東京・青山の「こどもの城」の劇場入口を飾っていた壁画で、世界中の子供たちへ送る時空を越えた、平和の喜びに満ち溢れた夢物語だ。ゆえに戦禍の愚かさを代弁する「ニューヨークの天使」と並列させることで、戦争と平和という、相反するものが共存する「不二法門」を具現化する空間となる。

一方の「朝陽富嶽玉取り龍 不二法門」は、大阪湾を見下ろす抜群の眺望を誇る天空ギャラリーに展示され、黄金背景の舞台上で旋回している。壮大な作品のイメージ世界と、眼下にする人々の生活・日々の営みを見比べた時、自然と藝術、虚と実が織りなす「不二」の空間に、あらためて美術・藝術の偉大さを、そして生命の神秘と人間精神の深奥を垣間見るのではないだろうか。

絹谷幸二は常日頃から「現世にこそ極楽がある」と説き、人生を謳歌することの重要性を問いかけてきた。輝ける生命への賛美を絵筆に込めて、この熱きメッセージを送りつづけてきたのである。困難な時代を生きる今、絹谷藝術を体感することによって、コロナ禍や自然災害で疲弊した日常を飛び越し、人間の無限の可能性を見つめ「復活」を信じることができるのではないだろうか。

今年一月に来館したあの世界的なロックバンド「クイーン」の名ギタリスト、ブライアン・メイ氏が、絹谷藝術のパワーに感服し「私の新しい扉を開けてくれた」と大絶賛したが、まさに絹谷幸二 天空美術館が抱く理想はこの一言に尽きる。美術を通じで、人々の新たなる旅立ちを後押しし、再生への祈りを捧げる至福の場でもありたいと切に願うのである。

人類を元気に！美術の力を今こそ。

2020年1月にブライアン・メイ氏　来館

作品紹介「波乗り七福神」 The Seven Gods of Good Fortune Riding the Surf

絹谷幸二 天空美術館　アシスタントキュレーター・エデュケーター　高橋暁生

私は現在、月次で開催するワークショップ「アフレスコを描く」を担当している。当ワークショプはその名の通り、参加者に普段はなかなか触れることのない壁画の古典技法であるアフレスコを体験していただく内容であるが、毎回、絵画体験前には１時間ほどの展示解説を行っている。 館内を参加者と一緒に観て廻り、絹谷作品の解説やアフレスコの仕組みや技術をご紹介する。そして、エネルギッシュで色彩豊かな絹谷ワールドを堪能した後、そこから得たインスピレーションをもとにアフレスコ制作に挑戦するといったプログラムである。 参加対象は特に限定していないが、毎開催とも小学生の子どもと、ご両親の親子参加の割合が高い。

解説時、子どもの参加者が多い場合、私は一方的な解説をするだけでなく子どもたちの意見や感想を聞き、会話をしながら鑑賞するようにしている。それは、一方的な解説では子どもたちが飽きてしまうという理由もあるが、何よりも子どもたちの感想は非常に創造的で興味深いものが多いからである。そしてそれを参加者全員に共有することは、一連の作品鑑賞がより深みを増すきっかけとなり、私自身を含め大人の鑑賞者（全員ではないが）がいかに既成概念に染まりながら作品を観ているのかという気づきにも繋がるからである。例えば、先日体験した気づきを少しご紹介すると『祝・飛龍不二法門』の解説時、子どもたちに「何が描かれている？」や「どんな色が使われている？」と質問をしているとその中の一人が、龍が両手に持つ宝珠を見て「月と太陽が描かれている」と教えてくれたのである。おそらく、絹谷幸二も月と太陽も想定しながらこれらの宝珠を描いたと推測されるが、大変恥ずかしいことに、私はそれまでこの宝珠を”月と太陽”として捉えたことがなかったのである。既成概念に囚われた自身の想像力を反省すると共に、ここにも「不二法門」が表現されていたのかと勉強になったことを覚えている。

祝・飛龍不二法門　2013 （ミクストメディア）

さて少し前置きが長くなったが、今回の作品紹介ではそんなワークショップの作品解説でも特に子どもたちに人気のある一点『波乗り七福神』について取り上げたいと思う。

この『波乗り七福神』は、お馴染みの七福神がジェットスキーで楽しそうに波乗りしている様子が描かれている。手前より左から大黒天、弁財天、寿老人、毘沙門天と並び二人乗りが布袋、恵比寿、そして最上部に福禄寿が描かれる。これらの神は一般的にヒンドゥー教、仏教、道教、神道と様々な異なる背景を持ち、国籍もインド、中国、日本などバラバラであるとされている。それは、現在の言葉でいうと“ダイバーシティ（多様性）”であり、古来よりシルクロード の最東端に位置し多くの異国の文化や神々を受け入れてきた日本人の受容性を象徴するものであるように思う。いずれにしてもこの作品は、底抜けに明るくユーモア溢れる絹谷ワールドの真骨頂であり、モチーフが持つ包容力に合わせ、春風駘蕩な絹谷幸二の人柄が感じられる作品ではないだろうか。

子どもたちは豊かな表情と珍しいポージングの七福神を面白がり、大人たちは既知の七福神とは異なるシチュエーションにクスッと笑う、そうした来館者みんなに愛されている作品だと私は思う。

しかし今回、私がこの『波乗り七福神』を取り上げたいのは、ユーモラスな作風で鑑賞者の心を掴む作品であることだけでなく、絹谷幸二の画家としての挑戦と切なる思いが込められた一点であると考えるからである。

私がそのことに気づかされたのは、絹谷がどれほど忙しい時でも時間を作り東奔西走している「子ども 夢・アート・アカデミー」の出前授業へ随行した時のことである。なお、「子ども 夢・アート・アカデミー」とは日本藝術院と文化庁の共催事業であり、美術・文芸・音楽・演劇・舞踊の分野における最高峰の芸術家である日本芸術院会員が全国の小・中高等学校を訪問し、講和や実技披露、実技指導を行い、子どもたちに文化芸術活動の素晴らしさや夢を持って生きることの大切さを伝え、豊かな心や感性の継承・育成を図る社会貢献事業である。

波乗り七福神　2011 （ミクストメディア）

絹谷はそこで、“絵は上手に描く必要はなく、自分が描きたいものがきちんと表現出来ているかが大切だ”と説く。美術・芸術の世界では、人と同じである必要はなく、正解も一つではない。「１＋１」の答えが３でも４でも良いのが、美術・芸術の醍醐味であるから、無限のイメージを以て自分がこれだと思う色を使って、自分なりの方法で表現することが重要であると教える。そうした個々の多様性を尊重した絹谷の教えは、子どもたちには目から鱗の体験で、描くこと・イメージすることの楽しさや喜びに出会うきっかけになっているのではないかと思う。

子どもたちにとって自分らしい絵を描くこととは自分の表現の可能性を信じ、夢を描く力やイメージの展開力を培うことであり、そのためには

何よりも先ず絵を描くことを好きになることが必要なことを、絹谷はこの出前授業を通して丁寧に教え導くのである。

そして私はこの『波乗り七福神』こそが、こうした絹谷の子どもたちへのメッセージが込められた示範作品なのではないかと考える。この作品はまさに絹谷独自のイメージであり、他に同様のものを見たことがない。絹谷が描きたいように七福神を描いた作品である。そうしたストレートな自己表現には多寡を問わず賛否両論があり、絹谷の立場であれば尚更ではないかと思う。しかし、そうであっても描ききるこの作品には、絹谷のどうしても伝えたい切なるメッセージが込められていると私は考える。そしてそれこそが、「子ども 夢・アート・アカデミー」で子どもたちに伝え続けているメッセージであり、率先垂範として示したものではないだろうか。

開館当初に開催した絹谷本人がレクチャーするワークショップの様子

さらに絹谷は、取材のインタビューで絵画の中に文字を描くことに対して、「最初はマンガみたいとか、口からおかしな言葉が出ていて絵画らしくないなどと批判もあった。でも認められた後は、後輩が胸襟を開いて思う通りに絵を描くきっかけのひとつになったかもしれないと思う。 そうであれば、うれしい。」（『月刊美術』2017 年 8 月号「弾ける色彩のエネルギー 絹谷幸二のすべて」サン・アート）と語っている。私はこの言葉こそ、先ほどの実践的な教えとともに、絹谷が『波乗り七福神』を描いた真意ではないかと考えている。この作品に文字は描かれていないが、真に自由であることを推奨し、ある種のタブー化されたような砕けた表現さえも臆することなく真剣に描き切るその裏側には、この作品が世に認められた暁として、後世の画家たちそして子どもたちの表現の幅を広げたいという意図があるのではないだろうか。

絹谷は制作において継承していくこと、未来のために繋ぎ残していくことを大切にしている。当館にある多くの作品にもそうしたメッセージが込められている。今を生きる我々に向けて、そして未来を担う次の世代に向けて、作品を通していつもメッセージを送り、会話しようとしているのである。アフレスコという堅牢性が高く、数百～数千年もの時を超える絵画技法を選んだ絹谷本人は当然のこととしてそれを捉えているのかもしれないが、そこには画家としての強い使命感、さらに深層を掘り起こすと芸術･美術を通して社会に何が出来るのかということに真摯に向き合った、一私人としての絹谷幸二の人となりが見えてくるように思う。

そのため私は、冒頭でご紹介したワークショップの作品解説でも、一方的な説明に終始するのではなく、なるべく作品と鑑賞者の会話をファシリテートしたいと考えている。作品との会話は子どもたちの自由な発想を活性化し、双眼を以て価値観を広げることに繋がると信じている。そして何より、大局的見地に立ち子どもたちの多様性を包み込む絹谷芸術に触れることが、美術・芸術を好きになるきっかけになって欲しいと心より願っている。

美術館からのお知らせ

新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた対応について

絹谷幸二 天空美術館は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため 2020 年 3 月 5 日（木）～6 月 2 日（火）の間、政府の緊急事態宣言および大阪府の休業自粛要請を受け、臨時休館いたしました。再開以降も当館では引き続き、皆様が安心してご来館いただけるよう感染防止対策に努めて参ります。ご来館の皆様へのお願いとともに、詳細は下記 URL をご確認いただけますようよろしくお願いいたします。

■「ご来館の皆様へのお願い」と「新型コロナウイルス感染防止のための当館の対策」

https://www.kinutani-tenku.jp/topics/detail.php?pkId=63

ご理解、ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

絹谷幸二 天空美術館「友の会」会員募集のお知らせ

絹谷幸二 天空美術館「友の会」では、無料の会員サービスとしてイベントや展示など天空美術館の様々な情報をメール配信いたします。ご入会ご希望の方は下記の QR コードまたはホームページの「友の会」よりご登録下さい。

絹谷幸二 天空美術館ホームページ

http://www.kinutani-tenku.jp/

2020 年 11 月 2 日発行　　Melody of the Firmament ／天空の調べ　vol.3

編集・発行　絹谷幸二 天空美術館

大阪市北区大淀中 1-1-30 梅田スカイビル タワーウエスト 27 階